

## メールレター(52)

### 春の叙勲

春のそよ風が足踏みをし、なかなか本格的な春になりません。今日は、しとしと雨模様です。美しい花と緑が、あくびをしながら出番を待っているかのようです。

そんな日々、マダム田中に春の叙勲(旭日双光章)受章の嬉しい知らせが届きました。カナダ(ケベック州、モントリオール市)にて華道を通じての日本文化普及への貢献、功勞に対して授与されました。名誉な、ありがたいことです。今まで支えてきてくれた家族や世話になってきた親戚、恩師、友人の方々に少しは恩返しができるかもしれないと心温まる思いです。子供達、孫達の心の中にも、日本が錨を下ろしていくかもしれません。こちらのいけばな界の友人達には、拍手喝采の何よりの嬉しいニュースだったようです。

バッハのフーガとトッカータ二短調を聞きながら朝のコーヒーを飲む、ドリトル先生のコーヒーカップは、今日も、なぜか左手に。

「この曲は、17世紀にもてはやされた教会の音楽なんだ。神と一体化してるような雄大で厳かな曲なんだ。僕のお父さんのお葬式にはサン・ドニの教会のパイプオルガンで追悼のレクイエムにこの曲を弾いてもらったんだ。」

一曲が遙かな昔を思い出させてくれるようです。このドリトル先生は、4月半ばに右肩の手術を受け、静養中です。右手はまだ使えないのです。

「大丈夫、大丈夫、すぐ終わるから。」

と笑いながら、オペティミストのドリトル先生は手術室に消えていきました。ハイテクの1時間半という奇跡のような手術でした。ただ、麻酔などの準備の2時間、手術1時間半、手術後の麻酔から覚める待機の2時間、打ち合わせなどをいれると6時間半に及ぶものでした。やはり大手手術でした。コロナ禍で、喫茶店もレストランも閉まっているため、マダム田中は、この間、病院の隅っこの椅子でずっと待ち続けていました。

やっと出てきたドリトル先生は、手術後はまだ鎮静剤が効いていて、いわば、麻薬ずけの、極めてハイテンパーな状態です。迎えにきた義理の長男の車に乗り込むと、

「新車？」

「買ったばかりのBMW」

ドリトル先生の目には興味深々の星マークが飛び交います。

「手術終わったばかりだから、運転させないでね。麻薬が効いてるから、猛スピードで突っ走るかもしれないから。関節二つ取り除いて、メタルやセラミックでつないでやっつくっついてる肩がめっちゃめっちゃになるから。」

「わかってる。パパ、隣に大人しく座っていて。」

ドリトル先生は、がっかりして黙って隣に大人しく座っています。薬局に寄って、治療に必要な薬の手配をし、家路を辿ります。

翌日、病院に迎えに来てくれた義理の長男に無事に可愛い女の子が生まれました。再婚相手の奥さんは、41歳の高年齢出産のため、主治医のスケジュールに合わせ、1週間早目に促進剤を打って出産することになっていました。元プロテニスプレイヤーの奥さんは、前々日まで、走ってテニスをしていたそうです。促進剤による出産とはいえ、3人目の出産(上の二人の男の子は前夫との間の子供)でもあり、陣痛が起きてから5時間ほどの安産だったようです。ルーマニアを出て以来、母娘二人で二人三脚でずっと暮らしてきたお嫁さんには、亡くなった母親との日々を思い出させ、娘の誕生は特別な思いだったようです。ドリトル先生には6人目の孫です。

手術後のドリトル先生の体には哺乳瓶と呼ばれる鎮痛剤の点滴の瓶がぶら下がり、テープで貼り付けてありました。携帯点滴でしょうか。先端には、皮膚に針が注射されたままになっていて、48時間後にとるようになっていきます。ごろごろとあちこちにぶつかり、なんて面倒なんだと、ドリトル先生は閉口していました。翌朝になると、

「この哺乳瓶とって、針も引き抜いてくれるかなあ？」

「だって48時間後って言われてるのよ。」

「見てごらん、点滴の量が少しも減っていない。作動していない。」

ともかく、哺乳瓶を取り除き、針も引き抜くことにしました。あれほど色々と説明をしていた看護婦は、点滴を流す器具を設置しても、流れるようにきちんと開けなかったとしか思えません。医療ミスでしょうか。処方された鎮痛剤を指定通り飲ませることにしました。麻酔が完全に切れる1日後からは、傷口を冷やし、薬を飲み、痛みとの戦いです。24時間体制の看護になりました。ほぼ、一日中眠っているだけの状態が約1週間続きました。この間は、薬を定期的に飲ませ、水分をとらせ、少し食べさせるだけで精一杯です。食事も左手だけなので、鳥の餌のように小さく切った物か流動食をスプーンで食べるだけです。フォークは案外、刺すのに力があるので使いにくく、左手で使えるようになるのには2週間かかりました。

「ど、ど、どうしたの？それとっちゃったの。」

ドリトル先生は、事もあるうちに、10日目に、腕を固定しているサポーターの装具を外し、放り投げてしまいました。

「邪魔だ。自分で気をつけるから、こんなのいらない。」

「だって1ヶ月間つけているよう言われてるでしょう？」

「大丈夫、大丈夫。」

大丈夫どころか、時折痛み、また鎮痛剤を飲むことになりましたが、この日以来、装具はゴミ箱の中です。

手術後17日たち、

「仕事に行ってくる。」

「それが良いかも。車、自分で運転するの？大丈夫？痛くないの？」

「痛くなるかもね。でも行くから。」

まだまだ治療期間中なのですが、ここ1週間、動かない腕、時折やってくる痛み、コロナ禍で閉じこもる日々鬱々とし、沈み込み、座り込んだまま動こうとしませんでした。心身ともに疲れきっていました。この精神状態では、気力、体力が落ち、逆に肩の回復が遅れるのではないかとマダム田中には思えてきました。

閉所に閉じ込められると1週間で死んでしまうマサイ族のように、何もせず、閉じ込められたまままだと息ができず、どうにも耐えられそうもない様子でした。原始的なネアンデルタール人の遺伝子を持つドリトル先生は、治療の段階を大半スキップしても、サバイバルできるだろうし、好きなようにさせ、自分で調整させていかせた方がよさそうだとマダム田中には思えてきました。コロナ禍で剣道ができず、筋肉も落ち、更にこの手術で、筋肉は根こそぎ削ぎ取られましたが、そのうち思い立てば、何か見つけて体力作りをすることでしょう。マダム田中は、アバウトにそう判断すると、

「行ってらっしゃい。」

と、にこやかにドリトル先生を送りだしました。マダム田中も、閉所のマサイ族です。看護と、二人で息を潜めて暮らす日々の中、少し、一人で息がつかたいとも思っていました。花が咲き乱れる頃には、ドリトル先生もだいぶ回復して、持ち船に乗れるようになることでしょう。